

D.C. II 一風に舞う茜の花一

エス氏

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2054年、『枯れない桜の島』と言っていた初音島の桜は一斉に散つていった。

それと同じくして、島と人々に与えられていた恩恵もまた、夢が醒める様にゆっくりと霧散していく……

だが、時同じくして世界に恐るべき異変が進行し始めていった。

かつて桜の恩恵を受けていた風見学園の少女、花咲 茜。枯れない桜は幼くして他界した双子の妹、藍の魂を茜に憑依させ、長き時を共に生きる様にしてきた……しかし桜の恩恵は消え去り、茜は半身と化していた妹の喪失から立ち直れずにずつと引きずり続けていた。

そんな時、初音島にとある少年が現れる。

茜が彼と…そして、後に大切な存在となる古き存在と邂逅した時、初音島と世界を巡る新たな奇譚が幕を開けるのであった……

これは、桜の舞う平和な島で、神々と子供達の紡ぐ大いなる物語――

目 次

プロローグ

E
p
i
s
o
d
e—
0
1

運命の出会い（前編）
運命の出会い（中編）

15 4 1

プロローグ

春の朝日が煌めく中：桜の花びらが、風に揺られて飛んでいく……
誰にも邪魔されず、遮るものもなく、ただ風と共に戯れて飛んでいく……

普段だつたらさして気にもとめないんだけど、今日はなんだか気に
なつて……そして、私——花咲はな咲 茜あかね——は思わず立ち止まつた。

嗚呼、気持ちいいなあ……こんな感じに風を感じるのって……。

ここはいつもの通学路：今日は小恋ちゃんも杏ちゃんも義之くん
もいない。今いるのは私一人だけ——
柄にもなく早起きして登校してるんだけど、まさかこんな現象に出
会うなんて……

ふふつ、今日はラツキード心地良い風の恵みを茜さん、一人占めし
ちゃつた。

「あ、茜——！」

そうして余韻に浸つてると、通学路から聞きなれた声が聞こえてき
た。

「おう、お早う。こんな朝早くに珍しいな。」

「何かいいことでもあつた？顔にやけてるよ。」

やつてきたのは、クラスメートの月島つきしま 小恋ちゃんと同級生の白河しらかわ

ななかさん。そして、数少ない

ボーイフレンドで……私達が密かに想つていた少年、桜内さくない 義之よしゆき

くん……

「あ、みんな～、お早～～～～！」

ちよつと後ろ髪を引かれつつも、私はみんなの所にトテトテと駆け
寄つていつた……

*

この時、私はまだ知らなかつた……。

近い未来……2つの運命的な出会いと共に、平穏な日常が終わつてしまふことに

*

俺の眼前に、グロテスクな怪物が迫つてくる。
ぬめぬめした半魚人の様な怪物が5匹。俺——飛鳥あすか——
焰ほむら——が今まで
何度も相手してきた奴等だ。

「クトウルーの眷属か……こんな『インスマス面』如きで……！」俺は躊躇無く持っていた翡翠色の銃を構えると、怪物共に向けて狙いを定める。

その言葉と共に幾つものマズルフラッシュが閃き……そして小さな怪物が4匹、傷穴から濁った液体を噴出して事切れる。しかし、直後にその背後から、ひときわ大きな「インスマス面」が襲ってくる。

焰

「クトウグア、行くぞ。」

承知した。

途端に、そいつの右手が炎に包まれる……そして、自分より大きな「インスマス面」の頭を掴みあげた。

『消えろ……呪われた哀れな眷属が——』

そして次の瞬間怪物はぐくもぐた悲鳴を上げながら炎上し崩れ落ちた。

シミン二ンアリート……んな糸魚相手しや脇か鍔るな……」
少し物足りなさを感じながらも、俺は端末を開く。

〔新たな指令か?〕

赤い軍服の青年——クトウグア——が、右手に手袋を被せながら言つ

た。

「ああ、今度は長期任務になる。行き先は——
日本、初音島だ……！」

*

風を感じる少女、花咲 茜：

そして、灼熱の炎纏う少年、飛鳥 焰：

旧支配者の加護を受けし2人が出会う時、沈黙のままに微睡んでいた世界は再び動き出す……

彼らと仲間達を待ち受けるのは、希望か、絶望か、それとも……

全ての答えは、古の神々と数多の魔道書達だけが知っている——

Episode—01 運命の出会い（前編）

枯れない桜……その恩恵が消えていくと共に、影響下にあつた初音島は少しづつ微睡から目覚め始めていった……

しかし、それと共に桜の授けた奇跡もまた、目覚めの如く消え去つていく――

ある者は他者の心を読む能力を、ある者は決して衰えない記憶力を、またある者は、『奇跡』と共に産み落とされた自身の存在そのもの

そして、長きを共に過ごしてきた「半身」を喪失した者もまた、その事実を直視できず彷徨い続けていた――

「藍ちゃん」

夕暮れの光が舞う教室で、花咲茜はその名を呟いていた。

既に世を去つて久しい双子の妹……しかし、『枯れない桜』の恩恵で再び自分の中に戻ってきた、掛け替えの無い存在……

しかし、その妹はもう何処にもいない

枯れない桜の恩恵が消失したのと同じくして、彼女もまた茜の中から去つて行つてしまつたから――

*

その日の朝――私は、藍ちゃんの夢を見た……

まだ生きていた頃と変わらない姿恰好のまま、ニコツと笑つて駆け出していく……

——藍ちゃん……！——

私は藍ちゃんを追い掛けようとするけど体が金縛りにあつたかのようにな動かない。

待つて！つと言いたかつたが、声もだすことが出来なかつた。そうこうしていく内に藍ちゃんはどんどん私から遠ざかっていく。

バツ!!

「ハア……ハア……」

目を覚ますとそこはいつもと変わらない私の部屋。自分の喉から放たれる荒い呼吸が、自分の耳に木霊しているだけだつた……

「…………ううう————藍ちゃん。」

その瞬間私の中で抑えられていた何かが溢れ出た……そんな気がしたんだ————

藍ちゃんが私の中にもういないのは勿論分かつている。

だけど、会いたくて仕方がなかつたの。

姿は見れなくてもいい……ただ、あの声をもう一度だけ聞きたかつたんだ————それが永遠に叶わないつて分かつていたとしても……

*

「花咲先輩……？」

ぼんやりしていた茜の耳朶を討つたのは、ドアの付近から掛けられた声だつた。

「……あれ、 ゆ、 由夢ちゃん??」

カラカラと扉を引いたのは、自分の知り合いの1人。1学年年下の少女、朝倉由夢だつた。

「茜……こんな所で何やつてたんだ？」

その隣で佇む小柄な少女は、茜のクラスメートである男子中学生、桜内義之。隣には、心配そうに茜を見据える小恋とななか、それに同じく友人である小柄な少女、雪村杏の姿もあつた。

「あ……ありやりや、 皆そろつて心配かけちやつたかなあ～～～？ 茜さんつてば、おつちよこちよいだね～～～」

知人達に今の姿を見られたのは予想外。慌てて取り繕う茜であったが、5人とも心配そうな表情を崩さなかつた。

「そんな顔してりや心配するぜ。 何か悩みもあるのか……？」

普段は異性からの行為に気付かない程の鈍感……なのだが、こんな時に限つて義之は勘が鋭い。茜が今、惑いの渦中にいる事など即座に看破してしまう。

しかし、茜の願いは永劫に叶う事がない。分かつていても無意識にそれを求めてしまう、そんな悲劇的な自己矛盾が茜の心にズンとのしかかつていた……

「あんたが何を悩んでるのか、今の私達にはわからないわ……でも、話すだけでも少しは気が楽になると思う。笑つたりしないから、ちょっと聞かせてみなさいな」

そんな時口を開いたのは、この中で最も付き合いの長い友人である杏。いつもと同じ寡黙な表情ではあつたが、その目には真剣な輝きが

僅かに感じ取れた。

「あ……あのね、聞いて欲しいんだ……夢物語つて言われるかも
しれないけどさ、でも……聞いて欲しいって思うの——
気付いた時——茜は知らず知らずのうちに、口を開いてい
た。

*

今までずっと……ママにだつて話したことが無い、藍ちゃんとの思
い出……2人で1つの身体になつてから的事、その時急に話したく
なつちやつた……

例え信じてくれないつて分かつっていても、何でかな……皆には聞い
て欲しい。この時の私は、そんな思いに駆られていたんだ……

7年前……

後に『紀伊半島大津波』つて言われる海難事故で私と藍ちゃんは一
緒に溺れてしまい……そして、私だけが生き残ってしまった。でも、
藍ちゃんが目覚める事は無かつた。

あの頃の私は引っ込み思案でオドオドしていて、活発な藍ちゃんの
影でいつも大人しくしてゐる……そんな感じの子だつた。なのに、今ま
でずつと一緒だと思つていた姉妹がいなくなつちゃつたこと……そ
れは、私にとつて、世界が真つ暗になるほど悲しい事だつた……

だから、私は手を出してしまつた……枯れない桜に願つてしまつ
たんだ……

そこまで話し終わつた後……皆の間には沈黙が流れていった。

「そうだつたのか……すまなかつたな、気付けなくて」

義之くんは、そう言つて申し訳なさそうに頭を垂れる。

—ずっと背負い続けてきたんだね…………茜…………」

小恋せやんも
何んか悲しそうに目を伏せていた

も解決なんてしないわ』

暫くして杏ちゃんがそう言つたのを聞て、それを合図に皆で

「あの、花咲先輩…………みんな…………こんなこと、今言つていいのか分かん
ないけど…………でも、私達からも聞いて欲しいの」

時だつた。

「由夢ちゃん？」

由夢ちゃんは、さつきよりも悲痛な面持ちで、ぽつり、ぽつり、話し始めた……

そして、私達は全てを知つてしまつた。

義之君が、枯れない桜の魔法で召喚された存在……本来なら、この世界に存在することさえ叶わなかつた存在だということ……そして、音姫先輩が魔法使いで、義之君を救うために尽力していたということも……

「そんな・・・」

小恋ちゃんが、口元を押さえて立ちすくむ。その藍色の瞳から、大粒の涙が零れ落ちていくのが見えた……

「そうだつたのね：だから、義之は——」

杏ちゃんも、痛々しい顔で由夢ちゃんの言葉を聞いていた。

「そんな…こんなのが、あんまりだよ。最初からいなかつたことにな

るなんて…しかも、みんなの記憶から消えちゃうなんて…」

いつもはポジティブな白河さんも、スカートの裾を握り締めて俯いている…

「そ、そんな顔すんなって」

義之くんは悲痛な面持ちの私を励ましたいのか、真剣な表情で私を見つめている。

「由夢が茜に言いたいのは、妹さんの事を忘れないで欲しいって事だと思うんだ…忘れないって事は、それだけでも凄い事だつて俺は思う。だから茜も、妹さんの事を覚えていてほしい…そう言う事だと思うんだ」

「や、この話はここまでです。もう遅いですし、帰りましょ！」

いつもの調子に戻った由夢ちゃんの声に、私の意識は現実に引き戻される。

「茜…？」

不意に、小恋ちゃんが心配そうに私の顔を覗き込む。

「ど、どしたの？何かぼくつとしてたみたいだけど…」

白河さんも何か気付いたのか、同じ様にこつちを覗き込んでくる。

「あ・ううん、何でもないよ…」

適当に誤魔化す私。

でも…

「あ…、ごめん。ちょっと、用事があるの思い出しちやつて…悪いけど、今日は1人で帰つてもいいかな…？」

返事も聞かず、私は走り出していた。

涙が、私の瞳から容赦なく滲み出る。

用事なんて理由をつけて別れたけど、こんな姿でいたら、またみんなに迷惑をかけちゃうよね…

「…どうしよう…」

ぽつりと出てきた言葉は、夜空に舞い踊る風の中に消えていく…

そんな思いで立ちすくんでいた時……

私は、出会つた…出会つてしまつた…

月光と桜吹雪の中で佇む
あの子と

*

「貴女、泣いていたのですか？」
どこを歩いてるのかさえ、分からぬ……。そんな時だつた。上方から声が聞こえたのは……。

ふと見上げると、目の前には石段と鳥居がそびえ立つてゐる。
ああ、此処は胡ノ宮神社だつたんだ……と思つた時、不意に目の前に何かの影がフワツと舞い降りてきた。

「……そのような悲しい顔など、似合いません。さあ……」

気が付いた時……そこには女の子が一人、柔和な笑みを浮かべて佇んでいた。桜色の着物と桜を模した髪飾りが似合う、銀色の髪の子だつた。

貴女は……貴女は一体、誰？

*

……茜……茜！

「ふにゅ？」

耳元に響く声に、夢見心地だつた私の意識は一気に覚醒した。

「あう～～～、もう、当てられてるよう・茜つてば～～」

...?

ぱつちり目を開けると……あれれ？ 困った顔で私を突いてる小恋

せんかいた

「はわわ?!?」
そして呆れ顔で私を見るクニノアートのみんなが……

びっくりして私は立ち上がる。それと同時に、小恋ちゃん、杏ちゃん、白河さん、義之くん……1年3組のみんなの大爆笑が響き渡った。

「いやあ〜、花咲が睡眠学習とは…中々珍しいこともあるのだ

「そんなに嬉しそうに言わないで～～～もう、死ぬほど恥ずかる。私の机に腰掛けた杉並くんが、面白そうな顔で私を見つめてくる。

しか二たんだから

真つ赤な顔で杉並くんを睨むけど、全然効果なし……

「あはは♪ 義之君の居眠りはよく見てるけど、花咲さんは初めて
『新魚なものを見せてもらいたい』

だよ／＼

しかも杏ちゃんと白河さんにまで突っ込まれる。

それにしても、小恋じやなくて茜がいじられ役つて、初めてだな」

と共に、消えてしまつた男の子

義之くんが戻ってきたのは、私達が本校に上がった次の週のこと

今でも一部の人は転校生だと思つてるみたいだけど、私達は・・・

「私、杏ちゃん、小恋ちゃん、渉くん、杉並くん、白河さんは、彼が現わたるれた途端……全てを思い出していた……」

今まで消え去つていた義之くんとの記憶……何もかもが無に還つた筈なのに、私達は鮮明に思い出せた…………

あれから1週間。気まずい事になるかと思つたけど、私達と義之くんは元通り「仲の良い友達」に戻つた。幸い、関係がぎくしゃくすることもなく、義之くんも私に気さくに話してくれるようになつた。

教室のドアが勢い良く開いたのは、その時だつた。

「やつほー、みんな久し振りいーーー！」

ハイテンションでやつてきた、金髪の小柄な女の子。

彼女は芳乃とくじらの和達の見学をにぎはる風見学園の学園長。

この世に生み出した張本人。

暴走しかけていた「枯れない桜」を抑えるため、自ら桜に取り込まれた……ということだつたけど、義之くんが戻つてくるのと同時に彼女も戻つてきた…………みたい。

!

そんなことを考えてると……この学園長はとんでもないことを言つちやつた！

「突然なんだけどね、明日からこのクラスに転校生がやつてきまーーす！みんな、仲良くしてあげてねえ～～～♪」

つて、転校生―――!?

*

「茜……」

「どしたの、杏ちゃん」

帰り道、杏ちゃんと一緒にクレープを食べてた私に、杏ちゃんが話しかけてきた。

「茜は、転校生ってどんな子だと思う？」

うーーん、いきなりそんなこと言われても、どう答えていいのか皆目、見当がつかないよう。

「そういう杏ちゃんは、どう思うの？」

質問を返された杏ちゃんは、

「そうね……少なくとも、只者じやなさそうね。あの学園長が直々に紹介するんだもの、きっと、何かある……もしかしたら、義之や朝倉先輩みたいな魔法使いかもしれないわね」

確かに……あんな話を聞いた後だと、有り得ない話じやないって思えるね。

「かもしだれないねえ……」

そう言いつつ、ちらりと時計を見ると……あ、午後8時を指していた。

いつけなーーい、もうそろそろ帰らなきや！

「杏ちゃん、もう遅いし、早く帰ろうよ……」

そう言いながら、私は何気なく杏ちゃんの方を向いた。

もしも……

もしも私達がこの時、桜公園に寄り道してなかつたら……。
もしも昨日、あの女の子と出会つていなければ……。

きつと、何も知らずに終わつてたかもしれない……平穏な日常がずっと続いたかもしだれない……

でも――

氣付いた時はもう始まり……私達は、知らず知らずのうちに非日常への道を選んでしまつてたんだ――

*

風見学園の屋上で、杉並は1人夕暮れの空を見つめていた。

「やはり始まつてしまふのか、『ヨグ・ソトース』……」

普段からアルカイックスマイルを終始浮かべている彼だったが、今は真剣な表情で夜の帳が降りる空をジッと見据えている。

「そうなれば、我等の取る道もおのずと決まつてくる……だろう?」

そんな彼に、背後から見慣れない人影が話しかける。犬の様に尖つた顔をした、背格好が丸まつた奇妙な男……その異形の人影を一瞥した杉並は、さほど驚いた様子も見せず再び空に向き直つた。

『プレアデス同盟』の使者も、もう既に到着している頃か……『ピックマン』、芳乃 さくらに直ちに現状を報告してくれ

「了解した」

ピックマンと呼ばれた異形の人影は、一言そう言うと次の瞬間には屋上から消失していた。

「始まる……人と神の織り成す凄惨なる戦いが……『永劫の探究』が、再び――

E p i S o d e — 0 2 運命の出会い（中編）

夜の帳の中で、桜の花吹雪と共に巨大な飛行物体が降下してくる。その降りてくる物体を、芳乃 さくらと杉並は真剣な表情で見守つていた。

「まさか、あいつらを寄越してくるとはな……クロウもウインゲイトも人が悪い」

着陸した物体……大型のヘリコプターを目の当たりにして、杉並はフンと鼻を鳴らした。

「それだけ本腰を入れなきやいけないって事なんだと思うよ……これは万一の事があつてはいけない任務だから」

「だが、現場での裁量はお前に一任されている。もしもの時は判断は任せること」

さくらが心配そうに呟くと、杉並は彼女を労う様にそつと肩を叩いた。

「朝倉や天枷達の事もあるからな……俺も、初音島を奴等のいい様にさせたくはない。あいつも恐らくそう言うだろう」

程無くして、ヘリコプターの側面のドアがガラツと開かれる。そこから、2つの影が初音島に降り立つていた……

*

異臭。

その魚が腐った様な芳香に茜が気付いたのは、帰ろうとその場を立つた瞬間だつた。

（あれ……な、何だろ？この変な臭い……）

桜の香りに混じつて、微妙に漂つてくる生臭い香り……不意に感じた悪臭に不快感を覚えつつ杏の方を向いた時、茜は思わずぎょっとし

ていた。

杏が何時の間にか茜の方を凝視している。いつもの様に追及する様な眼差しじやない。何かに怯える様な、もしくは警戒する様な余裕の無い表情で……

さながら、それはまるで茜の背後に何か得体のしれないものを見てしまつた様に、驚愕と戦慄に満ち溢れているものだった——

「あ……茜……」

杏が恐る恐る茜に声をかける。

「あ、杏ちゃん……どうしたの？ 何か変なのでも——」

茜は立ち上がり、杏に向かつてそろそろと歩み寄る。

その時……

「…………んう!?」

茜の鼻孔に、先程まで微かだつた異臭が鮮明に漂つてきていた。
そして、更なる恐怖が全身を浸透していく……自身の背後から聞こえる、荒い息使いと共に……

自分の後ろに何かがいる……姿が見えないのに、ひしひしと漂う悪意と恐怖を漂わせて……

一体、何が……？

生まれてこのかた経験したことのない未知の恐怖に晒されて、茜は恐る恐る振り向こうとした……その時、

「茜！ 危ない!!!

今まで及び腰だつた杏が、不意に彼女の手を思いつきり引っ張つていた。

「きゃっ……」

急に腕を引っ張られ、思わず前につんのめつてしまふ。

その瞬間、後ろにいたモノの姿が一瞬、視界に入り込む様に露わになる。

そこにいたのは……

魚に似た頭、蛙みたいに膨れ上がった大きな口と濁つた眼、水かきのある長い四肢、首筋に見えるエラの様なひだ、そして全身をてらてらした鱗で覆われた、おぞましい生き物だつた。

そんな怪物が2匹、獲物を見る様に2人を凝視していた。

「ひい——は、わわわ……！」

全身がガクガクと小刻みに震える。

怖い……

今の茜の思考を占めていたのは、恐怖。もはやそれしか思い浮かばなかつた。

途端に、

ドサツ……

隣にいた杏が崩れ落ちる。恐怖で意識を失つた様だつた……

そして、茜も……眼前に突如現れた脅威を目の当たりにし、あまりの恐怖にへたり込んでしまつていた。

そんな彼女に、怪物が悪臭を漂わせながら迫つてくる。

動けない標的の眼前に迫つた怪物は、蛙みたいなくぐもつた声を出して舌舐めめざりをする。まるで、茜と杏のどちらから食べようか… そう言つてる様にさえ見えた。

「あ……あ……」

抵抗する術もない。逃げ出そうにも、腰が抜けて動けない……今の茜に出来るのは、杏を抱きしめてガタガタと震える事だけだつた。

*

私の頭に何か突き刺さるような感触がしたのは、その時だつた……

聞いたこともない奇妙な言葉が、頭の中に反芻する。

何だからもうわけわかんない……でも、どうしてかな…………？

その時はただ、頭の中に浮かんだその言葉を言わなきやならない……何としても唱えないといけない…………そんな気がしたんだ……！

——イア・イア・ハスター……

そう思つた時……私の口から、その言葉は紡ぎだされていた……

——イア・イア・ハスター……ウグ・ウグ・イア・イア・ハスター……クファヤク・ブルグトゥム・ブグトラグルン・ブルグトゥム——
——アイ・アイ……ハスター——!!!

一度放たれた言葉は、堰を切つたように滔々と……そして濺みなく、尚且つどこか力の籠つた不思議な響きを伴つて紡ぎだされていく……

途端に、怪物が腕を振り上げ……そして、私達めがけて無造作に振り下ろしていた。

「つ!!」

思わず私は杏ちゃんを抱き寄せて、瞳を閉じた。

これからやつてくる、「死」をせめて心地よく受け入れるため……

でも、その瞬間はいつこうに来なかつた。

「目を開けて下さい、我が新たなる主よ……」

瞬間……私の耳に、別の誰かの声が聞こえてきた。

恐る恐る目を開けた私の視界に移つたのは――――――

桜色の着物を纏い、銀色の扇で怪物の腕を食い止めている銀髪の女の子の姿だつた。

「……哀れなる深きものどもよ……散れ!!」

鋭い言葉を放つたと思うと、女の子は両手の扇を軽やかに振るう。勝負は一瞬でついた。

「深きものども」……そう呼ばれた2匹の怪物は、扇が振られた瞬間に音もなく真っ2つに切り裂かれていた。

きつと、悲鳴ひとつ上げる間もなかつたと思う……でも、その動きは鮮やかで、しなやかで、そして何処か美しい……とさえ思つてしまふ程、私の視界に煌めいていた――――――

そして……

女の子は、地面に転がつた怪物を一瞥すると、不意に私の方を向いた。

「昨日振りですね……貴女が私の新たなる主でしようか?」

瞬間――――私は気付いてしまつた。

そこにいたのは、昨日胡ノ宮神社で出会つた、あの娘だつた……

そのことが分かった時、初めてその娘の顔をじっくりと見て……
「——藍ちゃん……？」

気が付いた時、私はその名を口にしていた…………もう二度と会えないと思つていた、妹の名前を……

*

同時刻、初音島北東、ヘリポート

「……!?

ヘリポートに集つた者達は、脳裏に突き刺さる様に響く不快感に一樣に顔をしかめていた。

「この気配……奴らか」

そんな中、いち早く動いたのはヘリコプターから降りた2つの影だつた。

「焰!?

「俺が行く!」

焰と呼ばれた少年は、黒いコートを靡かせながらその場を離れようとする。しかし……

「この気配は……!?

赤い服の長身の青年が、何かを感じ取つたように夜の町の一角一桜公園一の1点を凝視する。

「焰……何かが現れたぞ」

青年は、今駆けだそうとした黒ずくめの少年を振り仰ぐ。

「これは……インスマス面じやない、この強い気配——『旧支配者』だ!」

少年は、手に持つていた分厚い本を懷にしまうと、腰から銃を引き抜く。

「こんな早々にお出ましとはな……上等だ、プレアデス同盟の名に懸けて、始末する……！」

そして、慣れた手つきで銃に弾を込めると、少年——飛鳥 焰——は跳躍していた。

「行くぞ、クトウグア！」

「心得た！」

青年——クトウグア——も、少年の後を追つて、月夜に跳躍する。
(そうだ……俺の使命は、この地球に仇名す旧支配者を討つ事——
——これ以上、あいつ等の好きにさせるものか！)

「全く……暫く見ないうちに随分と刺々しいエージェントになつてしまつていたな、目を合わせただけで殺氣がこちらまで漂ってきたよ」
焰とクトウグアが退出した後、杉並が誰に聞かせる様にでもなくボツリと呟くのが聞こえた。

「とにかく芳乃 さくら……本当にあいつでいいのか？このままでは『ハスター』を保護するどころか撃ち滅ぼす可能性もあるのではないか？」

そして、今度は何かを懸念する様に問い合わせる。

「ボクは……彼を信じてる」

「そりやうか……では、疑いをかけるのは無粋だな」

さくらの言葉に安心したのか、杉並はふうっと息を吐くと……次の瞬間には、ヘリポートから姿を消してしまっていた。

(焰くん……そうだよ。君は兵器なんかじゃない、きっと変わることが出来る——ここには、思い出のあの娘だつているんだから)

3つの影が去ったヘリポートで、芳乃 さくらは桜吹雪の舞う夜空を静かに見つめていた。